

齊藤茂吉全集

第二卷

(第十一回配本)

昭和二十八年三月十四日 第一刷發行

齋藤茂吉全集 第二卷

定價三百九十圓

著者 齋藤 茂吉
さいとう もろ吉

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波 雄二 郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地
山田 一 雄



發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三

株式會社

岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・牧製本

目次

遠遊

維也納歌稿其一	三
ドウナウ下航	二五
ブダペスト	二七
獨逸旅行	二九
維也納歌稿其二	四四
維也納歌稿其三	六一
伊太利亞の旅	八六
維也納歌稿其四	一〇一
後記	一〇五

遍歴

ミュンヘン漫吟其一	一〇九
ミュンヘン漫吟其二	一三五
ドナウ源流行	一四八
山の旅	一六一
ガルミツシュ行	一六六
獨逸の旅	一六九
最後のミュンヘン	一八一
巴里雜歌其一	一八二
歐羅巴の旅	一八九
巴里雜歌其二	二〇八
歸航漫吟	二三三
後記	二四九

ともしび

大正十四年

歸國	二五三
火難	二五四
焼あと	二五五
隨緣近作	二五五
長崎往反	二六〇
近江蓮華寺行其一	二六二
近江蓮華寺行其二	二六三
醒が井途上	二六四
摺針越抄	二六五
閉居吟其一	二六五
閉居吟其二	二六七
逢坂山	二六八
沙羅雙樹花	二六九
木曾福島	二七一
木曾山中其一	二七二
木曾鞍馬溪	二七四

木曾山中其二	二七五
木曾氷が瀬其一	二七六
木曾氷が瀬其二	二七八
木曾氷が瀬其三	二八〇
閉居吟其三	二八二
比叡山安居會	二八四
高野山其一	二八五
高野山其二	二八七
熊野越其一	二八九
熊野越其二	二九一
箱根漫吟の中其一	二九三
箱根漫吟の中其二	二九五
箱根漫吟の中其三	二九八
草好癖	二九九
渾沌	三〇一
雑歌控	三〇四

昭和元年

家常茶飯	三〇六
雪ぐもり	三〇七
寒月集	三〇七
山房の夜中	三〇九
山房漫吟其他	三一〇
麥の秋	三二五
三峯山上	三二五
上野國に入る	三二六
歩道の氷	三二七
金線草	三二八
諏訪	三二九
霜	三三一
信濃數日	三三三
高遠	三三四

童馬漫吟	三三
この日ごろ	三六
この夜ごろ眠りがたし	三七
奉悼歌	三八

昭和二年

昭和二年歳旦頌	三〇
山房小歌	三〇
伊東浴泉雑歌の中	三三
春のはだれ	三三
非	三四
雨	三五
童馬山房折々	三六
永平寺吟	三〇
アララギ第四回安居會	四〇
大佛寺途上	四一

玲瓏巖	三四二
門外・歸途	三四三
永平寺漫吟補遺	三四四
十國峠	三四五
青山墓地	三四六
信濃行其一	三四七
信濃行其二	三四八
信濃行其三	三四九
天龍川其一	三五〇
天龍川其二	三五二
妙高溫泉其一	三五三
妙高溫泉其二	三五四
晩秋	三五五
業餘の吟	三五六
この日頃	三五八
雑歌	三五九

昭和三年

折に觸れつつ	三六一
近時	三六二
淺草をりをり	三六三
この日ごろ	三六四
折に觸れて	三六五
青根	三六五
C病棟	三六六
業餘小吟	三六七
仙臺	三六八
三山參拜の歌	三六九
志津	三六九
湯殿山	三七一
月山	三七四
羽黒	三七七

歸路	三七八
出羽三山	三七九
最上平野を遊ぶ	三七九
草むら	三八〇
歌會	三八一
折々の歌	三八二
奉祝	三八四
冬	三八五
籠喪	三八六
雑歌	三八七
御大典奉祝歌	三八九
後記	三九三
後記	一

遠遊

維也納歌稿 其一

大正十一年一月十三日午前八時伯林 Anhalterbahnhof を出發
して維也納に向ふ。前田茂三郎君見おくる

わが心やうやく和^{なご}み雪つもる獨逸のくにを南^{みなみ}へくだる

見わたしの畑に雪降りかぎりには黒くつづける常^{とき}緑^{はき}樹^{もり}の森

牛の二頭あるひは馬の二頭にて耕^{たがや}せる見ゆ冬の畑^{はたけ}に

ひむがしの空^{そら}の一と^{くれなる}ころ紅^{くれない}のにじみたる見ゆ寒きドイツに

カバン負ひて小學兒童行く見ればいづこの國も穉^{をさな}はかなし

かくのごと朝早くより働ける獨逸農夫を見すぐし兼ねき

落葉樹らくえふじゆの木立こだちのなかに水たまりあり折々反射はんしゃの光をはなつ

丘陵きやうりやうがゆるくつづきてその上に林あり墓地ほちあるを吾が見つつ居る

童子等の櫓そりの遊びの目に入りし小さき家の一廊も見ゆ

寺の尖塔せんたふが見えしとおもふに大きな停車場にとまるドレスデンなり

水量みかさましひたにごりたるエルベエルベの河を満みたして雪はながるる

ドレスデンをいでて間もなきにこの河の對岸たいがんの山に雪降りにけり

シヤンダウを過ぎてあらはれし谿谷けいこくを目守まもりてゐたり遠とほき旅人たびびと

蒼き空はつかに見ゆるところあり山にかかりて雪ふりながら

雪ふかき國境こくきやうに來て吏りのまへに整理せいりとどかざりしトランクひら開く Tetschen (Décin)

午後六時半ごろ空そらにかすかなる月あることを氣づきつつ居り

二たびふたの國境こくきやうに來て無造作にわがトランクきよかに許可しるしの印うつ Gmünd (Cmun)

月かげの雪てらす國正目くにまさめにし塊オウス太利ストリアにわれ入りにけり

やうやくに月ひくきころおもほえず見えわたりけれ Donau の河は ドナウ

Droschke ドロシユケ といへるに乗りてわれ行けり石疊いしだたみなる冬の夜のおと Hôtel de France 投宿

公使館たづね來きたれば手續てづきをすまし居りつつ同胞どうばうにあふ 一月十五日

銀行より吾は歸りてこの國の紙幣いろいろ並べ見つつある 一月十六日